

令和5年度病虫害発生予報第6号の発表について

このことについて、次のとおり発表したので送付します。

《予報の概要》

作物名	病虫害名	予想発生量	作物名	病虫害名	予想発生量
水 稲	穂いもち	並	露地 キュウリ	斑点細菌病	並
	<b>紋枯病</b>	<b>やや多</b>		モザイク病	やや少
	斑点米カメムシ類	並		ミナミキイロアザミウマ	やや少
カンキツ	トビイロウンカ	やや少	青 ネギ	<b>疫病</b>	<b>やや多</b>
	黒点病	やや少		<b>軟腐病</b>	<b>やや多</b>
	かいよう病	並		ネギハモグリバエ	やや少
	ミカンハダニ	並	イ チ ゴ	炭疽病	並
ミカンサビダニ	並	うどんこ病		やや少	
モ モ	アブラムシ類	やや少	ア ス パ ラ ガ ス	<b>褐斑病</b>	<b>やや多</b>
	<b>せん孔細菌病</b>	<b>やや多</b>	露地キク	<b>白さび病</b>	<b>やや多</b>
	ハダニ類	並	野菜、花き の 共 通 害 虫	ハスモンヨトウ	並
モモハモグリガ	少	シロイチモジヨトウ		並	
<b>ナシヒメシンクイ</b>	<b>やや多</b>	タバコガ類 (タバコガ、オオタバコガ)		やや少	
炭疽病	並	アブラムシ類		並	
カ キ	<b>フジコナカイガ ラムシ</b>	<b>やや多</b>	<b>ハダニ類</b>	<b>やや多</b>	
	べと病	やや多	アザミウマ類	並	
ブ ド ウ	<b>カメムシ類</b>	<b>やや多</b>			
果樹の 共通害虫	べと病	並			
露地 キュウリ	<b>炭疽病</b>	<b>やや多</b>			
	褐斑病	並			
	うどんこ病	並			

**太文字の病虫害**：向こう1か月の間、発生状況に特に注意を要する病虫害を示す。

\* 予報根拠中の記号

- (+)：発生量を多くする要因
- (-)：発生量を少なくする要因
- (±)：発生量が平年並になる要因

# 令和5年度 病虫害発生予報 第6号(9月)

## A. 水稻の病虫害

### 1. 穂いもち

予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： 並

- 根 拠 (1) 綾歌郡綾川町の県予察圃場での8月下旬の葉いもちの発生量は平年並であった。(±)  
(2) 8月中旬の普通期栽培での葉いもちの発生量は平年並であった。(±)  
(3) 9月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(＋)

対 策 穂いもちの防除は、液剤は出穂直前から出穂期に、粒剤は穂ばらみ期に行う。出穂期を見極め、防除適期を失しないよう注意する。本年の様に、出穂後に天候不良が続く場合は、穂揃期の防除後にさらに追加防除も検討する。

### 2. 紋枯病

予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： **やや多**

- 根 拠 (1) 8月中旬の普通期栽培での発生量はやや少なかった。(－)  
(2) 綾歌郡綾川町の県予察圃場での8月下旬の紋枯病の発生量はやや多かった。(＋)  
(3) 9月の気象は気温が高く(＋)、降水量が平年並か多い(＋)予報である。

対 策 出穂後も上位進展が続く場合は、液剤や粉剤で早急に追加防除する。

### 3. 斑点米カメムシ類

予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： 並

- 根 拠 (1) 8月中旬の早短期水稻の穂上でのすくい取り調査では発生量はやや少なかった。(－)  
(2) 8月中旬の普通期栽培周辺の畦畔雑草のすくい取り調査では発生量はやや少なかった。(－)  
(3) 県予察灯でのミナミアオカメムシの8月の誘殺数は多かった。(＋)  
(4) 9月の気象は気温が高く(＋)、降水量が平年並か多い(－)予報である。

対 策 (1) 薬剤防除の時期は、液剤や粉剤の場合は出穂期頃とその10～15日後であり、粒剤の場合は7日程度早めて処理する。また、ミナミアオカメムシが繁殖している場合は、粒剤よりも速効的で効果が高いとされる液剤や粉剤の使用が望ましい。  
(2) 防除効果を高めるために、地域一斉防除に努める。  
(3) 出穂後の除草は、斑点米カメムシ類の圃場への侵入を助長するので控える。

### 4. トビイロウンカ

予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： やや少

- 根 拠 (1) 綾歌郡綾川町の県予察圃場での発生は認めなかった。(－)  
(2) 8月中旬の早短期栽培及び普通期栽培での発生は認めなかった。(－)  
(3) 県予察灯での8月の誘殺数はやや少なかった。(－)  
(4) 9月の気象は気温が高い予報である。(＋)

- 対 策 (1) 出穂期頃の必須防除を徹底する。薬剤散布の際は斑点米カメムシ類の防除を兼ねて行う。
- (2) 圃場における発生状況を確認し、25株調査して250頭（株当たり10頭）以上の発生を認めたら早急に追加防除を行う。
- (3) 本虫の発生は、圃場間や同一圃場内でも偏りが大きいので、防除を行った場合でもその後の発生状況に十分注意し、防除効果を確認するとともに必要に応じて追加防除する。
- (4) 本虫は株元に生息しているのので、薬剤散布は株元まで薬剤が届くよう、丁寧に行う。
- (5) 薬剤散布は、地域の防除暦などを参照して、収穫前日数や使用回数などの使用基準を遵守して行うとともに、周辺圃場への飛散防止に努める。

## B. 果樹の病害虫

### —カンキツ—

#### 1. 黒点病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： やや少

- 根 拠 (1) 県予察圃場での8月の発生量はやや少なかった。（－）
- (2) 一般圃場での8月下旬の発生量はやや少なかった。（－）
- (3) 9月の気象は降水量が平年並か多い予報である。（＋）

- 対 策 (1) 伝染源である枯枝を除去し、圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
- (2) 薬剤散布は、前回の散布から1か月以内または累積降水量250～300mmを目安に行う。

#### 2. かいよう病

予 想 発生地域： 中晩生カンキツ栽培地

発生量： 並

- 根 拠 (1) 一般圃場での8月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。（±）
- (2) 県予察圃場でのミカンハモグリガの8月の発生量は少なかった。（－）
- (3) 一般圃場でのミカンハモグリガの発生量はやや少なかった。（－）
- (4) 9月の気象は降水量が平年並か多い予報である。（＋）

- 対 策 (1) 発病した梢葉、果実は早めに除去し、圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
- (2) 樹勢を健全に保ち、ミカンハモグリガ防除と防風対策を徹底する。

#### 3. ミカンハダニ

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： 並

- 根 拠 (1) 一般圃場での8月下旬の発生量は認めなかった。（－）
- (2) 9月の気象は気温が高く（＋）、降水量が平年並か多い（－）予報である。

- 対 策 (1) 秋ダニが果実に寄生すると品質に悪影響を及ぼすので、寄生を認めれば直ちに薬剤防除を行う。
- (2) 薬剤抵抗性の発達を回避するため、同一系統薬剤の使用は年1回とする。

#### 4. ミカンサビダニ

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： 並

- 根 拠 (1) 県予察圃場での8月の発生は平年と同様に認めなかった。（±）
- (2) 一般圃場での8月下旬の発生は平年と同様に認めなかった（±）
- (3) 9月の気象は気温が高く（＋）、降水量が平年並か多い（－）予報である。

対 策 発生が多い圃場では、9月中旬までに防除する。

#### 5. アブラムシ類

予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： やや少

根 拠 (1) 一般圃場での8月下旬の発生量はやや少なかった。(－)  
(2) 9月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(－)

対 策 発生が多い圃場では、防除する。

### －モ モー

#### 1. せん孔細菌病

予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： **やや多**

根 拠 (1) 県予察圃場での8月の発生量は平年並であった。(±)  
(2) 一般圃場での8月下旬の発生量は平年並であった。(±)  
(3) 9月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(＋)

対 策 (1) 発病枝は伝染源・越冬源となるので、見つけしだい除去し圃場外に持ち出すなど適正に処分する。  
(2) 9月下旬から10月中旬の薬剤防除を徹底する。多発生圃場では薬剤を2回散布する。  
(3) 台風通過後など強い風雨の後に薬剤防除を実施するよう心がける。  
(4) 風当たりの強い圃場では、防風ネット等の防風対策を実施する。

#### 2. ハダニ類

予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： 並

根 拠 (1) 一般圃場での8月下旬の発生量はやや少なかった。(－)  
(2) 9月の気象は気温が高く(＋)、降水量が平年並か多い(－)予報である。

対 策 (1) 発生が多い圃場では、収穫後の薬剤防除を徹底する。  
(2) 薬剤抵抗性の発達を回避するため、同一系統薬剤の使用は年1回とする。

#### 3. モモハモグリガ

予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： 少

根 拠 (1) 県予察圃場での8月の発生は認めなかった。(－)  
(2) 県予察圃場のフェロモントラップでの8月の誘殺は認めなかった。(－)  
(3) 一般圃場での8月下旬の発生は認めなかった。(－)

対 策 本種の被害による早期落葉は、翌年の花芽確保ができなくなるなどの影響があるので、発生が多い圃場では防除する。

#### 4. ナシヒメシンクイ

予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： **やや多**

根 拠 (1) 県予察圃場での8月の発生量は平年並であった。(±)  
(2) 県予察圃場のフェロモントラップにおける8月の誘殺数は多かった。(＋)  
(3) 一般圃場での8月下旬の発生量はやや少なかった。(－)

対 策 収穫後の防除を行っていない圃場では、薬剤防除を実施する。

－カ キー

1. 炭疽病

予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： 並

- 根 拠 (1) 県予察圃場での8月の発生は認めなかった。(－)  
(2) 一般圃場での8月下旬の発生は認めなかった。(－)  
(3) 9月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(＋)

- 対 策 (1) 圃場内をよく観察して、発病果実や発病枝は見つけしだい除去し、圃場外に持ち出すなど適正に処分する。特に前年多発生した圃場では注意する。  
(2) 台風や長雨が予想される場合や常発圃場では、予防的に薬剤防除を行う。  
(3) 授粉樹や老木など、剪定や粗皮削り等の管理作業を実施していない樹の周辺で発生が増加する場合があるので注意する。  
(4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. フジコナカイガラムシ

予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： **やや多**

- 根 拠 (1) 一般圃場での8月中旬の発生量は平年並であった。(±)  
(2) 防除員報告では発生の多い地区があった。(＋)  
(3) 9月の気象は気温が高い予報である。(＋)

- 対 策 (1) 発生の多い圃場では9月の防除を徹底する。  
(2) 果実とヘタの隙間に生息しているので、薬剤散布は丁寧に行う。特に、スピードスプレーヤー（SS）による防除では、かけむらができないように走行経路を見直すなど注意する。

－ブドウ－

1. ベと病

予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： **やや多**

- 根 拠 (1) 一般圃場での8月下旬の発生量は平年並であった。(±)  
(2) 9月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(＋)

- 対 策 (1) 圃場の排水に努める。  
(2) 収穫後の薬剤防除を徹底する。  
(3) 薬剤防除は降雨の前後に重点をおく。

－果樹の共通害虫－

1. カメモシ類

予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： **やや多**

- 根 拠 (1) 8月の県予察圃場予察灯の誘殺数は平年並であった。(±)  
(2) 8月の綾歌郡綾川町の予察灯の誘殺数は平年並であった。(±)  
(3) 県予察灯でのクサギカメモシの8月の誘殺数はやや多かった。(＋)

- 対 策 (1) 圃場内をよく観察し、被害果実やカメモシ類の発生が見られる場合は、早急に薬剤散布を実施する。特にスギ、ヒノキ等が周辺に多い圃場や、過去に被害が認められた圃場では注意する。  
(2) 成虫は夕方に飛来し夜間加害するので、薬剤散布は夕方に広域かつ一斉に行うと効果的である。  
(3) 黄色蛍光灯は、チャバネアオカメモシには忌避効果があるが、ほかのカメモシには効果がないので注意する。

## C. 野菜、花きの病害虫

### 一 露地キュウリー

#### 1. ベと病

予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： 並

根 拠 (1) 秋キュウリーでの8月下旬の発生は認めなかった。(－)  
(2) 9月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(＋)

対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、肥料切れに注意し、樹勢が衰えないように栽培管理する。  
(2) 耐病性品種を用いる。  
(3) 整枝、誘引等を適切に行うとともに、老化葉や病斑の多い葉を除去し、通風を図る。除去した葉は適正に処分する。  
(4) 薬剤防除は予防的に実施し、初期感染を防ぐ。  
(5) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

#### 2. 炭疽病

予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： **やや多**

根 拠 (1) 秋キュウリーでの8月下旬の発生量は平年並であった。(±)  
(2) 9月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(＋)

対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、窒素過多にならないよう肥培管理する。  
(2) 整枝、誘引等を適切に行うとともに、老化葉や病斑の多い葉を除去し、通風を図る。除去した葉は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。  
(3) 薬剤防除は予防的に実施し、初期感染を防ぐ。  
(4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

#### 3. 褐斑病

予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： 並

根 拠 (1) 秋キュウリーでの8月下旬の発生量はやや少なかった。(－)  
(2) 9月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(＋)

対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、窒素過多にならないよう肥培管理する。  
(2) 耐病性品種を用いる。  
(3) 整枝、誘引等を適切に行うとともに、老化葉や病斑の多い葉を除去し、通風を図る。除去した葉は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。  
(4) 薬剤散布は予防的に実施し、初期感染を防ぐ。  
(5) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

#### 4. うどんこ病

予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： 並

根 拠 (1) 秋キュウリーでの8月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)  
(2) 9月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(＋)

対 策 (1) 窒素過多にならないよう肥培管理する。  
(2) 耐病性品種を用いる。  
(3) 薬剤防除は予防的に実施し、初期感染を防ぐ。  
(4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

## 5. 斑点細菌病

予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： 並

根 拠 (1) 秋キュウリでの8月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)  
(2) 9月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並か多い(+)予報である。

対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに過繁茂にならないよう栽培管理する。  
(2) 整枝、誘引等を適切に行うとともに、老化葉や病斑の多い葉を除去し、通風を図る。除去した葉は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。  
(3) 薬剤防除は予防的に実施し、初期感染を防ぐ。  
(4) 台風など大雨や強風の後は感染が助長されるので、早めに薬剤防除を行う。  
(5) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

## 6. モザイク病

予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： やや少

根 拠 (1) 秋キュウリでの8月下旬の発生は認めなかった。(－)  
(2) 秋キュウリでの8月下旬のアブラムシ類の発生量はやや少なかった。(－)

対 策 (1) アブラムシ類の防除を行う。  
(2) 発病株は、早期に抜き取り圃場外に持ち出すなど適正に処分する。  
(3) 収穫用具の消毒をする。

## 7. ミナミキイロアザミウマ

予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： やや少

根 拠 (1) 秋キュウリでの8月下旬の発生量はやや少なかった。(－)  
(2) 9月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並か多い(－)予報である。

対 策 (1) 光反射資材や防虫ネットを張るなどして、侵入防止対策を講じる。  
(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。  
(3) 施設の発生圃場では、栽培終了後、施設を密閉し死滅させる。  
(4) 本虫が媒介する黄化えそ病の発生地域では、本虫を対象に定植時に必ず粒剤または灌注処理し、定期的に薬剤防除を実施する。発病株を認めたら早急に地上部を除去し、圃場外に持ち出すなど適正に処分する。  
(5) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

## －青ネギー

### 1. 疫病

予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： **やや多**

根 拠 (1) 8月下旬の発生量はやや多かった。(＋)  
(2) 9月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(＋)

対 策 (1) 圃場の排水を良くし、水を長期間停滞させないようにする。  
(2) 発生の多い圃場では菌密度が高くなっているため、圃場をかえるか土壌消毒を実施する。  
(3) 薬剤防除は予防的に7～10日間隔で行う。  
(4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

## 2. 軟腐病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： **やや多**

根 拠 (1) 8月下旬の発生量は平年並であった。(±)

(2) 9月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並か多い(+) 予報である。

対 策 (1) 発生の多い圃場では菌密度が高くなっているなので、圃場をかえるか土壌消毒を実施する。

(2) 窒素質肥料の過不足がないよう肥培管理する。

(3) 圃場の排水を良くし、水を長期間停滞させないようにする。

(4) 薬剤防除は予防的に7～10日間隔で行う。

## 3. ネギハモグリバエ

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： やや少

根 拠 (1) 8月下旬の発生は認めなかった。(－)

(2) 9月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並か多い(－) 予報である。

対 策 (1) 防虫ネットを張るなどして、侵入防止対策を講じる。

(2) 摘葉した残さや、収穫終了後の茎葉は次作の発生源になるので、土中に埋めるか、古ビニール等で被覆するなど適切に処分する。

(3) 多発してからの防除は困難であるので、発生の兆しが見られたら早めに防除する。

(4) 定植時には育苗トレイ灌注または粒剤施用をする。

## －イチゴ－

### 1. 炭疽病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： 並

根 拠 (1) 育苗床での8月下旬の発生量はやや少なかった。(－)

(2) 9月の気象は気温が高い予報である。(＋)

対 策 (1) 発病株は見つけしだい除去し圃場外に持ち出すなど適正に処分する。

(2) 水滴の飛散等で伝染するので、発病が見られる圃場では、灌水の跳ね返り等がないように注意する。

(3) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

(4) 予防剤を定期的に散布し、発生が見られたら治療効果のある薬剤を散布する。

(5) Q o I 剤に対して耐性菌が確認されているので注意する。

### 2. うどんこ病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： やや少

根 拠 (1) 育苗床での8月下旬の発生は認めなかった。(－)

(2) 9月の気象は気温が高い予報である。(－)

対 策 (1) 本病は葉裏に発生することが多いので、こまめに観察して早期発見し、薬剤は葉裏までかかるよう丁寧に散布する。

(2) 発生圃場では、7～10日間隔で薬剤防除を行う。曇雨天が続く、急増が予想される場合には、治療効果のある剤を主体に5～7日間隔で防除を行う。

(3) 伝染源を絶つため、子苗(ランナー)を切り離れた後、親株は早期に除去し処分する。

(4) 草勢が衰えたり、窒素肥料の過多や葉が混み合うと多発しやすくなるので、適切な栽培管理を行う。



- (5) 7～8月の高温期になると白い粉状の分生胞子は見られなくなるが、病原菌は残存しているので、本圃へ発病株を持ち込まないように発病葉は可能な限り除去するとともに、育苗床での防除を徹底する。
- (6) 耐性菌の発生を防ぐために、同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。散布回数が多くなることから、各薬剤の使用回数及び収穫前日数を遵守する。

－アスパラガス－

1. 褐斑病

- 予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： **やや多**
- 根 拠 (1) 8月下旬の発生量はやや多かった。(+)  
(2) 9月の気象は気温が高い予報である。(+)
- 対 策 (1) 過繁茂にならないよう、茎葉の刈込みや適切な肥培管理を行う。  
(2) 刈り取った被害茎葉は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。  
(3) 発生前から予防的に薬剤散布を行う。

－露地キク－

1. 白さび病

- 予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： **やや多**
- 根 拠 (1) 8月下旬の発生は小ギクでは多く(+)、輪ギクでは平年と同様に認めなかった(±)。  
(2) 9月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(+)
- 対 策 (1) 窒素質肥料の過不足がないよう肥培管理をする。  
(2) 薬剤防除は予防的に実施し、発生量が増加した場合は、治療効果のある薬剤を散布する。  
(3) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

－野菜、花きの共通害虫－

1. ハスモンヨトウ

- 予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： 並
- 根 拠 (1) 8月下旬の発生量は秋キュウリでは平年並(±)、イチゴ育苗床では認めなかった(－)。  
(2) フェロモントラップでの8月の誘殺数は平年並であった。(±)  
(3) 9月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並か多い(－)予報である。
- 対 策 (1) 若齢幼虫は集団で食害するため、被害葉は表皮だけを残して白色になっているので、本圃の果菜類等ではこれらを発見したら摘葉するとともに薬剤防除を行う。  
(2) 施設の出入口やサイド換気口等の開口部に防虫ネットを張り、侵入を防止する。  
(3) 中老齢幼虫には薬剤の効果が悪るので、体長1cm以下の若齢幼虫期に薬剤防除を行う。  
(4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

## 2. シロイチモジヨトウ

- 予 想 発生地域： 県内全域  
対象作物： 青ネギ、アスパラガス、キク、カーネーション等  
発生量： 並
- 根 拠 (1) 8月下旬の青ネギでの発生量はやや少なかった。(－)  
(2) 綾歌郡綾川町のフェロモントラップでの8月誘殺数は平年並であった。(±)  
(3) 9月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並が多い(－) 予報である。
- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。  
(2) 施設の出入口やサイド換気口等の開口部に防虫ネットを張り、侵入を防止する。  
(3) 中老齢幼虫には薬剤の効果が劣るので、体長1 cm以下の若齢幼虫期に薬剤防除を行う。  
(4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

## 3. タバコガ類 (タバコガ、オオタバコガ)

- 予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： やや少
- 根 拠 (1) 8月下旬の秋キュウリでの発生量はやや少なかった。(－)  
(2) 防除員報告では、丸亀市飯山町のフェロモントラップでのオオタバコガの誘殺数はやや少なかった。(－)  
(3) 綾歌郡綾川町のタバコガ類のフェロモントラップでの誘殺数はやや少なかった。(－)  
(4) 9月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並が多い(－) 予報である。
- 対 策 (1) 施設の出入口やサイド換気口等の開口部に防虫ネットを張り、侵入を防止する。  
(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。  
(3) 花蕾や生長点を食害するので被害が見えたら直ちに薬剤防除を行う。  
(4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

## 4. アブラムシ類

- 予 想 発生地域： 県内全域  
発生量： 並
- 根 拠 (1) 8月下旬の発生量は秋キュウリでやや少なく(－)、イチゴ育苗床で平年並(±)、小ギクで発生は認めず(－)、輪ギクが多かった(+)。  
(2) 綾歌郡綾川町の黄色水盤での8月の誘殺数はやや多かった。(+)。  
(3) 9月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並が多い(－) 予報である。
- 対 策 (1) 今後作付けを行う場合は、防虫ネットで被覆する、または光反射資材を設置するなどして、侵入防止対策を講じる。  
(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。  
(3) 育苗期から生育初期に粒剤等を施用する。なお作物の種類に応じて農薬登録の適用に配慮する。  
(4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

## 5. ハダニ類

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： **やや多**

根 拠 (1) 8月下旬の発生量は秋キュウリでは平年並（±）、イチゴ育苗床ではやや多く（+）、アスパラガスではやや多く（+）、小ギクではやや多く（+）、輪ギクではやや多かった（+）。

(2) 9月の気象は気温が高く（+）、降水量が平年並か多い（-）予報である。

対 策 (1) 人による持ち込みを回避するため、発生圃場に入った着衣のまま未発生圃場に立ち入らない。

(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。

(3) 発生が局所的な場合には、スポット散布を行う。

(4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

## 6. アザミウマ類

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： 並

根 拠 (1) 8月下旬の発生量は秋キュウリではやや少なく（-）、青ネギでは平年並（±）、小ギクではやや少なく（-）、輪ギクではやや多かった。（+）

(2) 9月の気象は気温が高く（+）、降水量が平年並か多い（-）予報である。

対 策 (1) 野菜類及び花き類ではネギアザミウマの吸汁により、ウイルス病（ネギえそ条斑病等）が媒介される場合や食害痕から病原菌が侵入する場合があるので、食害が認められる場合は早期に防除を行う。

(2) 施設栽培では青色粘着トラップ等を利用して発生状況を確認し、発生が多い圃場では防除を行う。青ネギでは葉にわずかなカスリ状の食害痕が見られる場合に、アスパラガスでは、圃場内の数か所で成茎の擬葉が繁茂しているところを手で払って、10×20cm程度の板上に1か所当たり1～5頭の成虫を認めたら防除する。

(3) 防除後も表土中の蛹や葉肉内の卵が新たに羽化、孵化する場合もあるので、多発圃場では7～10日間隔で防除を行う。

(4) 露地栽培ではシルバーマルチ、施設栽培では目目が1mm以下のネット被覆することや周囲に乱反射シートを敷設することで飛び込み量を減らすことができる。

(5) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。

(6) 抵抗性発達回避のため、同一系統薬剤を連用しない。

農薬はラベルをよく読んで使用しましょう

病害虫防除所インターネットホームページ

URL: <https://www.pref.kagawa.lg.jp/byogaichuboj/index.html>



近隣農地の作物等や住宅地等での農薬飛散防止の注意が必要です。風の状況を確認し、飛散の恐れがあるときは散布作業を中止しましょう